論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

甲 ・ 乙	氏　名	江角　知香
学位論文名	Difference in p57 Expression Among Four Histological Types of Epithelial Ovarian Carcinoma	
学位論文審査委員	主　査 副　査 副　査	門田　球一　印 浦野　健　印 中山　健太郎　印

論文審査の結果の要旨

p57の遺伝子産物は、核内に移行してサイクリン依存性キナーゼ阻害タンパク質として働くことが知られており、このことからがん抑制遺伝子の一つと考えられている。さらに、細胞質内においても多様な細胞機能に関係するといわれている。様々ながんで p57 発現と悪性度や予後との関連が検討されてきたが、卵巣がんにおいては一致した結果が得られていない。申請者はこの点に着目し、卵巣がんの中で、悪性度に差のみられる4つの代表的な組織型［endometrioid (EC), serous (SC), mucinous (MC) and clear cell carcinoma (CCC)］の間で p57 発現に差があるのではないかと考え、県内の 3 施設から収集した 92 症例（EC; 18 例, SC; 31 例, MC; 14 例, CCC; 29 例）について、p57 の免疫染色を行い、核と細胞質での発現を検討した。92 症例のうち、p57 核陽性例が 6 例（6.5 %)、細胞質陽性例が 27 例（29.3 %）であった。組織型別に陽性症例の割合を比較したところ、核陽性例は CCC が有意に高く(CCC 17.2 % vs. non-CCC 1.6 %)、細胞質陽性例は EC で高かった(EC 55.6 % vs. non-EC 29.8 %)。これらは、患者の年齢、臨床ステージで調整しても有意であった。この結果をふまえ、申請者は、p57 の免疫染色は卵巣がんの組織型鑑別には有用とはいえないが、卵巣がん各組織型の生物学的特徴の解明の手がかりになるのではないかとの結論を得た。本研究はこれまで卵巣がんを対象に行われた p57 発現研究の中で最も網羅的なものであり、今後、卵巣がんの発生病理の解明に有用な知見を提供していることから、学位授与に値する成果と考える。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

本研究では卵巣がんの４つの組織型を対象にp57の発現を解析し、p57の核陽性例はclear cell carcinomaで有意に多いことを示した。質疑応答は適切で関連知識も豊富であった。卵巣がんにおけるp57の生物学的特徴を解明する糸口となる意義深い研究成果であり、学位の授与に値すると考える。
（主査：門田球一）

申請者は病理学的診断が難しい卵巣がん診断に、分子免疫学的視点を加味した分子病理学的手法を試みている。今回用いた p57 の免疫染色は組織型鑑別の有用性は認められなかったが、意欲的な取り組みであり、今後期待できる方法である。周辺知識も豊富で、学位授与に値すると判断した。
（副査：浦野健）

本研究ではサイクリン依存性キナーゼ阻害能を有するp57の免疫染色が卵巣がんの組織型を区別する補助診断として有用であるかを検討した臨床的に意義のある研究である。p57の補助診断として有用性は得られなかったが、卵巣がん各組織型の生物学的特徴の解明の手がかりになる可能性を見出した。申請者の研究に関連する周辺知識も豊富であり、学位授与に値すると判断した。
（副査：中山健太郎）

（備考）要旨は、それぞれ４００字程度とする。